近代福博の都心と百貨店

草野真樹

近代福博の都心

　何をもって都心と呼ぶか。その定義を問われそうだが、小売業の中心地という意味で言えば、近代福博（福岡・博多）の都心は博多であった。近世の博多部には東西を横断する目抜き通りがあり、麹屋番―掛町―綱場町―中間町―中石堂町―官内町を「六町筋」と呼んだ。黒田家の菩提寺・崇福寺へ通じ、道筋に商家が軒を連ね、近世来、集客力と繁栄を誇る本通りを形成した。明治七年、麹屋番の町名は麹屋町に改称されるが、その麹屋町―掛町―綱場町あたりは「掛筋」と呼ばれ、どっしりと構えた商売ぶりの老舗大店が並んだ。

　明治三十年代において掛筋で営業税・所得税の高い店舗をいくつか挙げてみると、麹屋町に呉服太物商の岩田屋（中牟田喜兵衛）、筆墨製造・文房具紙販売の復古堂（河原田平助）、綱場町に呉服反物商の袋又商店（吉田又吉）、中間町に質屋兼古物商の斧屋（野村久次）、中石堂町に醤油醸造販売業の多葉粉屋本家（奥村次吉）などがある。

　街の形成に道路や橋梁の整備が与える影響はとても大きい。博多に「袖の湊」の遺跡の名残りと伝えられる溝（大水道）があった。明治十三年、片土居から川端までの溝に石蓋をかぶせて、幅一間半足らず（約二・六㍍）の舗道がつくられた。寿橋に続くため寿小路と称したが、一般に「新道」また「寿通り」と呼ばれた。

　大正期には女性用品、奢侈品、美術品、玩具、装飾品などを取り扱う店が並び、にぎやかさのなかに独特の雰囲気を放っていたという。大物買いの掛筋とは対照的に、軽快に買い物を楽しむ博多の名所となる。

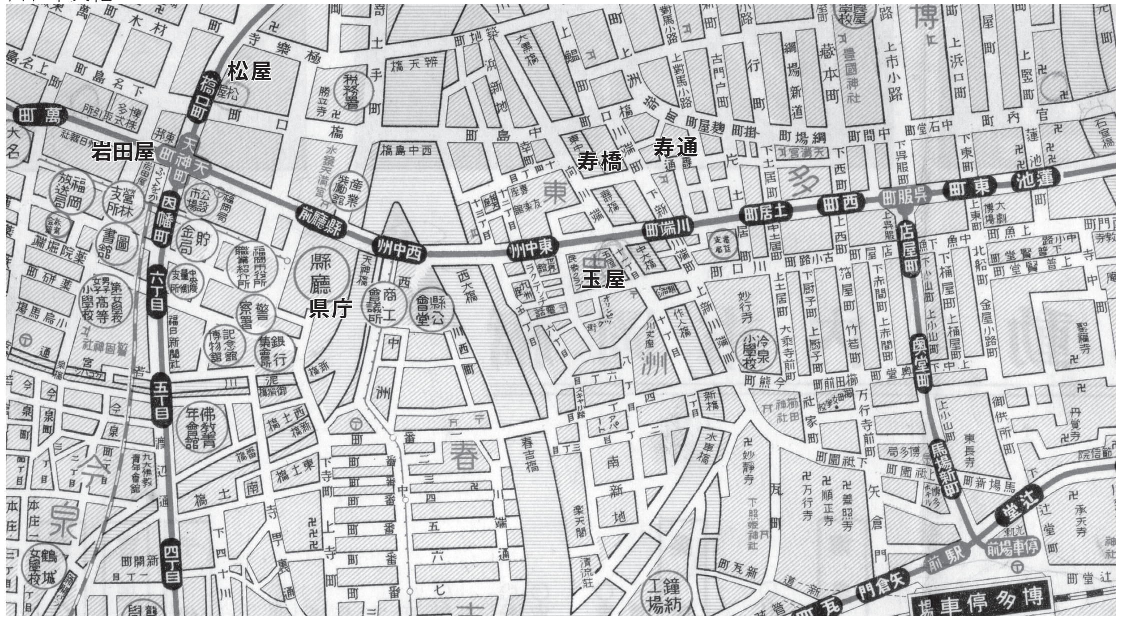
　さらに、路面電車の開通は人々の流れを変えた。明治四十三年、福岡県を二度目の会場として第一三回九州沖縄八県連合共進会が開催された。会場用地として那珂川まで伸びていた福岡城の外堀は埋め立てられ、共進会にあわせて福博電気軌道（貫通線）が走り始める。これを機に電車通りは福博を結ぶ新たなメインストリート（現在の明治通り）となる。人々の流れは、掛筋を中心とした本通り付近から中洲川端方面へと展開していく。

百貨店業の成立

　明治後期以降、東京や大阪など主要都市において百貨店が成立する。昭和初期には全国の地方都市でも百貨店の開業が相次ぐ。福岡市内での百貨店のはしりは、大正九年三月、東中洲町に設立された松葉屋呉服店が挙げられる。

　同店は東中洲町で松居織工場（博多織物製造兼販売業）を営む松居家の経営によるもので、呉服のほか和洋雑貨・化粧品などを取り扱った。三越が呉服店から百貨店化したように、それにならう心算で四階建て洋館とし、百貨店に発展させる構えだった。少女歌劇や音楽会などの集客策を取り入れ、食堂や通信販売部も置いた。しかし、大正十二年一月十七日の東中洲大火で全焼した。

　陳列販売、広い売り場面積、多種類の商品、部門別管理などを備える百貨店の登場は、大正十四年十月四日に開業した玉屋呉服店であった。前身は肥前国（佐賀県）牛津に田中丸善吉によって興された荒物商の田中丸商店である。明治以降、家督を譲り受けた初代善蔵は呉服類や小間物を取り扱い始める。その後、佐世保海軍への食料品や日用雑貨品供



近代福博の都心部（昭和12年「最新福岡市大形地図」より。九州歴史資料館所蔵）

東中洲町（昭和8年頃「情緒溢るる博多節」より。九州歴史資料館所蔵）
電車通りに面して玉屋呉服店（左のビル）

給などを契機に飛躍を遂げる。

　店舗は福博電気軌道が走る東中洲電車通りに位置した。開店初日は約四万七千人が訪れ、売り上げは五万三千円を記録した。関東大震災以降は百貨店の大衆化が叫ばれ、呉服などの高級品だけでなく、一般向け商品の販売も進んだ。

　昭和二年、東亜勧業博覧会の開催にあたり観光客向けに刊行された『福岡市案内』（一三四㌻）は、この一帯を次のように紹介している。殷賑を極める様子が伝わるだろう。

　此処で名高い玉屋のデパートと中洲京極のチェーンストア、九州日報社直営の国産商品館は道を挟んで百貨街を造り、品質の精良と嶄新とに顧客を呼んで、益々盛況を見せてゐる。中洲を歩るいた者は序に川端町から新道の小間物店を覗いて、帰途、掛筋（昔の本通り筋）に廻つてみるがよい。川端から新道や掛筋の間は明るい町の連続で、小間物化粧品、玩具の類から反物、洋品雑貨など珍らしい有らゆる流行品が大路小路を挟んで綺麗に陳列され、道行く人の心を唆らずには置かない

　百貨店は人々の購買行動を変えた。それまでの日常は、専門的な品ぞろえの小売店で必要なものを購入することだった。しかし、百貨店を訪れると多種類の商品が一店舗内に揃っていた。それらは華やかに陳列され、人々の購買欲を喚起した。食堂や遊技場も設置され、総合的な集客施設として、百貨店はその社会的地位を急速に高めていく。一方、これ

に危機感を抱き始めた中小商業者たちは商業集積で対抗し、中洲川端方面は近代福博随一の商業地として活況を呈する。

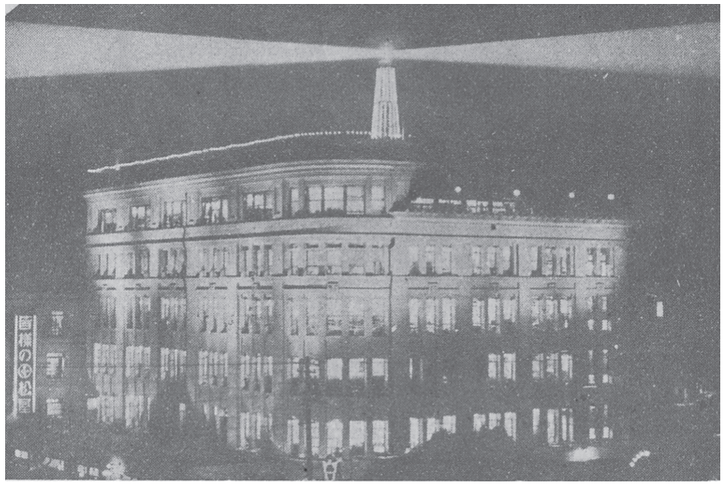
異彩を放つ松屋

商業の中心地たる博多方面に対し、近代の福岡方面は官庁街・ビジネス街・文教地区として整備が進んだ。その福岡方面に百貨店経営の先鞭をつけたのは宮村吉蔵だった。宮村は滋賀県に生まれ、十二歳のころ、既述の松居織工場の京都支店に丁稚奉公し、その後、博多の本店に転じて修業を重ねた。そもそも松居家は近江の出であり、同郷の縁による。

明治四十四年、宮村は慰労金を元手に独立し、福岡橋口町に小さなモスリン店を開く。福岡橋口町への出店には商売に向かない立地であるから思い留まるよう忠告する者もいた。しかし、宮村は、むしろそのような立地にこそ新たなビジネスチャンスを見出す。大正二年十一月、呉服太物雑貨商として「松屋呉服店」に改め、同八年十月「合名会社松屋呉服店」へ発展させる。経営は軌道に乗り、合名会社化当初の資本金三万円だったものは四〇万円、のち株式会社となり百万円まで増資された。

この成長を支えた要因は、「松屋式」と称された異彩を放つ経営にあった。「戊申詔書ヲ奉戴シ…」の名文句で始まる「松屋の憲法」は広く知られた。「贅沢品ヲ斥ケ実用呉服ヲ販売」「利益ハ薄クシテ平均ニ」「親子兄弟親族朋友ノ間柄ト雖モ値引ト貸売ハ断然不仕候」などと、近江商人の精神を引き継ぐようにモットーを掲げた（のち店訓が加わり、松屋の憲法の文言は多少変わる）。

数年間隔で増改築を繰り返し、店舗を大規模化させていく手法もユニークだった。昭和四年十月、三階建て鉄筋コンクリートビルへ改築し、取り扱う商品を化粧品、子供用品、家庭用品、履物、文具、傘など増大させた。さらに昭和七年から八年にかけて大増築を行い、三千坪近くの店舗となる。館内には西日本で初めてエスカレーターを導入し、屋上には二万円を投じて航空灯台を建設した。光度四百万燭光の灯りは、遠く大刀洗方面に及び、夜間飛行を助けるとともに、日中には福博を一望できる新たな名所ともなった。



空の灯台輝く松屋百貨店の夜景（昭和10年頃）
（「歓迎！福岡市観光案内 福岡名所 松屋百貨店」より）

百貨店激戦区へ

松屋は「良品廉価と薄利多売」に徹した経営を展開し、福博の小売業界に旋風を巻き起こす。インパクトの強い松屋式広告で消費者心理を揺さぶる。衆目をひくため、大売出しの呼び物として店舗正面に一丈八尺の大提灯を下げたりもした（『福岡日日新聞』S10/6/27）。顧客は福岡市内にとどまらず、糸島、早良、筑紫、糟屋など周辺地域からの人気を得て、多くの来客があった。あまりの混雑ぶりに警察官が来客の入場停止を命じたこともあった。店頭入口には「毎度ありがとう存じます」と頭を垂れる宮村の姿があり、「松屋の爺さん」と親しまれた。

いよいよ、百貨店商戦はピークを迎える。昭和十一年十月、中牟田喜兵衛の岩田屋が天神町にオープンする。開店の挨拶は「福岡市の中心街天神町の十字路に久留米行急行電車の起点を取入れた所謂ターミナルデパート」、そして「郷土福岡が生んだ唯一の百貨店」であることを強調した（同前 S11/10/3）。

岩田屋が開店記念に錦繡名裳展、秋の競彩会、九州初の西陣織物大会などをアピールすると、松屋は「天下無双の肉弾廉価」（同 S11/10/7）、「くに乱れて忠臣出て　業界乱れて真価を発揮　愈よ松屋の活躍舞台　買物人気は松屋が独占」（同前 S11/10/9）などセンセーショナルな広告で対抗した。松屋の名文句「お見物は岩田屋で、お買物は松屋で」なども登場し話題となった。

岩田屋が福助足袋を一足五銭で売り出せば、松屋は二銭で売り出し、岩田屋は再び値下げする。営業時間もライバル店より長く、長く。ここに玉屋が参戦して、福博は全国有数の百貨店激戦区となる。

百貨店問題は中小商業者をさらなる窮地に追い込み、全国的な反百貨店運動は昭和十二年百貨店法の制定へ繋がる。しかし、法の存否に関わらず商戦は終える。日本は大戦の時代へ、生産と消費は統制の時代へ突入する。

復興と動く都心

昭和二十年六月十九日、福岡大空襲により福博は一面焼け野原となる。博多、中洲川端方面の商店街はほぼ全滅した。焼け野原からの復興は、被災を免れた天神町の岩田屋の建物を中心に商店街の形成から始まる。百貨店、地場企業、博多で店舗を焼失した商人、戦災者、引揚者、そして行政が一体となり「新天町商店街」（昭和二十一年）、「因幡町商店街」（同二十二年）、「西鉄街」（同二十四年）などを形成した。東中洲の玉屋も下新川端商店街など復興する商店街の中核となる。ここに戦前の百貨店と中小商業者の対立構図はない。都心再興へ一致協力する想いと行動が戦後復興の原動力となる。

これに対し、博多方面の本格的な復興はややずれこみ、昭和三十三年「博多駅地区土地区画整理」事業から進展する。昭和四十二年には「博多駅周辺高層建築物設置条例」の制定により博多駅前に大型ビルの建設が相次ぐ。関東・関西方面に本店を置く会社の支店進出が加速され、博多駅周辺は新たなビジネス街として復興していく。その反面、博多でそれぞれに由来ある名称をもった一三〇近い旧町は、昭和四十一年の「町界町名整理事業」によって整理統合されていった。

都心は動く。この過程を通じ近代と現代の福博はその主たる都心の性格を逆転させる。福岡方面は西鉄福岡（天神）を中心に小売業の拠点、博多方面は博多駅を中心にビジネスの拠点へと重点を移す。そして今、「天神ビッグバン」と「博多コネクティッド」による再開発が進められている。さあ、新時代の福博はどのような顔を見せていくのだろうか。

〈主な参考文献〉
・井上精三『福岡町名散歩』葦書房、一九八三年
・岩田屋経営史編集委員会編『岩田屋経営五十年史』岩田屋、一九八六年
・咲山恭三『博多中洲ものがたり　後編』文献出版、一九八〇年
・長田義彦編『福岡市案内』東亜勧業博覧会協賛会、一九二七年
・博多を語る会編『大正の博多記　第一部』同会、一九七四年
・福岡市役所編『福岡市史 第一巻 明治編』福岡市役所、一九五九年
・『福岡日日新聞』『九州日報』『官報』

くさの　まさき・九州産業大学　准教授